

版本『可美豫能真起』考

要旨

今般新出の『加美豫能真起』は日本書紀神代卷上下の版本であり、江戸時代後期頃の出版と考えられる。本書はかつて『無刊記七行本』と仮に呼んでいた一本と同版と思しく、大本ながら一面七行詰めとして、字間・行間を広めに取っているという特色があり、これは何らかの書き込みを意図した体裁と想像される。本考では本書の書誌概要を報告し、併せて本書と流布本である寛文九年版本の本文・訓点を比較し、両者がごく近い関係にあることを確認した。今後、本書に見える書き込みと版本としての訓読の記述の関係を考え、加点行為と注釈行為の質的な変化の一端をたどる資料としたい。

はじめに

本紙先号⁽¹⁾に小考「解釈は訓読にどのように反映されるか——松岡雄淵『神代紀師説』と小寺清先『校正日本書紀』——」を掲載していただき、『日本書紀』において漢文本文に解釈説を加える行為と、訓読をする行為は、少なくとも江戸時代後期頃に於いては、漢文本文に対する立場を異にするものであると考えられることを述べた。おそらく、訓読という行為は、当該漢文

を理解するという行為と一体のものとして行われていたであろうが、後には、いったん訓読した上で解釈する、というように一連の行為の段階として行われたのではないかと思われる跡を、『日本書紀』の加点本類、注釈書類を一瞥する中にいくつも見いだしてきた。このことを、観点を変えて考えると、訓読という行為は当該の漢文文献寄りの立場で、解釈という行為は解釈者自身の立場で行われるのであって、結果として現れた訓点と解釈説の具体的表現には、そのことを反映したと考えられる差異が見られた。

*1) 杉浦克己

*1) 放送大学助教授（人間の探究）

例えば、訓読における敬語表現は、加点者の本文に対する立場を最も端的に反映したものとと言えるが、その一つから以下のような例を挙げることができる。神代卷上「瑞珠盟約章」では、登場する天照大神と素戔鳴尊について、その発話に先立つ「曰」字の訓読として、天照大神については「ノタマフ」とするものがほとんどであるが、素戔鳴尊については「ノタマフ」とするものの他、「マウス」あるいは「マウシタマフ」とするものがある。物語の展開の上から言えばここでは天照大神と素戔鳴尊は明らかに対等の立場ではなく、天照大神がより高い位置に置いて描かれている。例えば同章本伝で素戔鳴尊の行動について「来参」とするなど、本文上の表現にもこれは表れている。従って、「曰」字について、天照大神には「ノタマフ」、素戔鳴尊は「マウス」或いは「マウシタマフ」と差を付けた加点は、本文により近い立場から成されたものであると理解することができ。しかし、本文から離れた立場で、例えば一神道家の立場でこの記述を見た場合、言うまでもなく天照大神も素戔鳴尊も神であつて、崇敬の対象であることに違いはない。このような立場に立てば、物語上の天照大神と素戔鳴尊の差異は意味を持たず、両神共に敬意の対象として「曰」字を「ノタマフ」と訓むことになる。先稿では、小寺清先『校正日本書紀』では天照大神については「ノタマフ」、素戔鳴尊については「マウシタマフ」と差異を付けて加点しているのに対して、清先の師である松岡

雄淵の『神代紀師説』ではその解釈文中で両神を共に「ノタマフ」としていることを掲げ、これが、前者は本文により近い立場から、後者は本文から離れた注釈者の立場から、その記述を見ているが故のことであろうと考えた。同様の理解が可能な例は随所に見られ、これまで、日本書紀諸伝本に見られる訓読上の差異の要因を、漠然と、「解釈の違い」と片付けていたことについて、より一歩踏み込んだ形での考察が可能ではないかとの感触を得ることができたのであった。

敬語表現は、本文に描かれた内容に対する加点者・注釈者の解釈が端的に表れる事項であるが、内容そのものを日本語としてどのような立場で表現するか、という観点からすれば、例えば述部に立つ述語動詞の部分で、「○○キ」と助動詞「キ」の付いた形で表すか、「○○ケリ」「○○タリ」のような助動詞を用いるか、さらに言えば、これら時に関わる表現を用いない形とするか、いくつかの表現形が考えられる。これらのうちのあつる形の述部を持つ文を連ねることによって日本語として表現された文章の描き出す世界は、元漢文を同じくするものであつても、互いに異なる立場からその内容を見ることになり、やはり加点者・注釈者の立場、特に想定する読者との関係における立場を反映したものと考えるべきであろう。

このようなことは、その背景に漢文文献を理解する行為と訓読する行為が、その根本に於いて性格を異にする、というこ

とつながるのであって、この観点に立つとすれば、ある漢文文献についての注釈書の類と加點本の類の関係を改めて見直さなければことになる。この考えに基づき、先考以降、改めて日本書紀神代巻の加點本類および注釈書類について、再分析を試みる作業に着手した。加點本類については、拙著³⁾およびその後のいくつかの小考によって、ほぼ現存の日本書紀神代巻諸伝本についての整理はできており、この元となった手元資料の再整理をこれに充てることができた。一方注釈書類については平成十四年度放送大学特別研究助成を得てこれまでに収集した資料の再調査、および新たな観点での資料蒐集を行い、両者を併せてある程度の論を立て得るとの感触を得るに到ることができた。

なお問題は大きく、十分な形で資料の整理・提示および考察は未だしいのではあるが、右のような過程で偶々、かつて拙著研究編に於いて取り上げた日本書紀神代巻の刊本のうち、未考として残し、仮に『無刊記七行本』とした一本について新たな資料を得ることができた。

『無刊記七行本』については、

- ・ 本文が一面七行となっている。大本の日本書紀の訓点付刊本では一面八行とするものが通例であり、本書のような行詰めは他に例がない。
- ・ 本文一行が十五文字であり、これも大本としては他の伝本

と比較して少ない。

- ・ 文字詰め行詰めは少ないが本文文字そのものは必ずしも大きくはなく、全体に字間行間の余白が大きく感じられる。
- ・ 漢籍類の刊本で、字間行間や上下の余白を広めに取り、初学者向けに書き込みの便を図ったものの例が知られているが、この類と同意図ではないかとも考えられる。

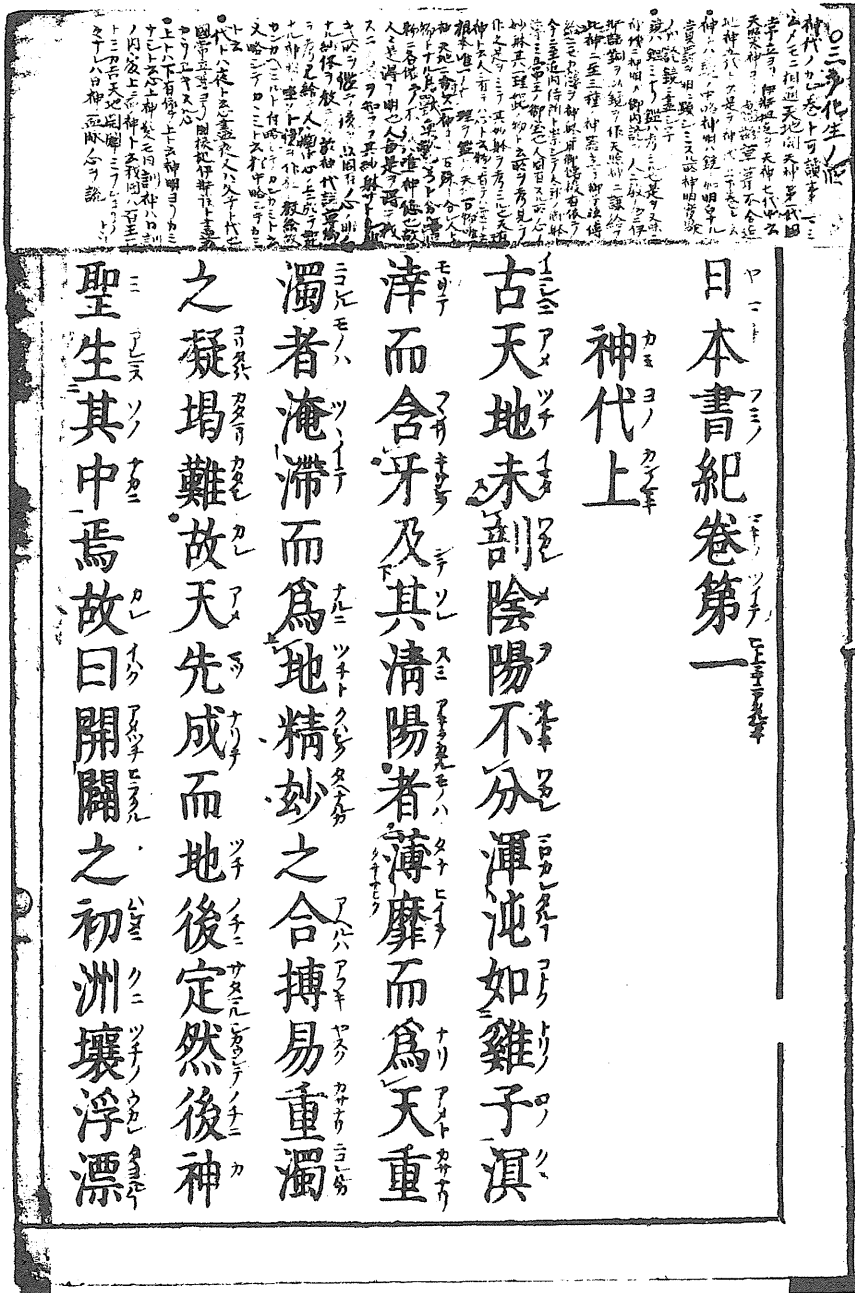
としたが、管見では同版の別本あるいは類似の特色を持つ別本を見いだし得ず、想像の域を出ないままになっていたのではあった。

今般偶々、資料蒐集の一環としてこの『無刊記七行本』と同版別本と思しい『可美豫能真起』と題する一本が架蔵に帰することとなり、仮に、右に挙げた「余白への書き込み」を意図した刊行物とすれば、先考以来念頭にある注釈と訓読との関係についても有用な資料となりうると考え、注釈書類についての資料蒐集の未だ中途段階ではあるが、本体となるべき論を暫く措いて、敢えて当該の一本について小考を加えた次第である。

版本『可美豫能真起』と『無刊記七行本』

版本『可美豫能真起』と『無刊記七行本』は紙型、表紙は異なるものの同版とみなして良いと思われる。以下にその書誌の概略を述べる。

図一 『可美豫能真起』 乾卷本文第一丁（墨付第三丁）表



圖二 『無刊記七行本』上卷本文第一丁（墨付第三丁）表

日本書紀卷第一

神代上

天地開闢之說

古天地未割陰陽不分渾沌如雞子真

泮而含牙及其清陽者薄靡而爲天重

濁者淹滯而爲地精妙之合搏易重濁

之凝竭難故天先成而地後定然後神

聖生其中焉故曰開闢之初洲壤浮漂

淹滯天地濁氣
精妙之陽分
純一無雜

上古諸神受天教

両本共に大本、袋綴（明朝綴）上下二冊本で、上冊に『日本書紀』巻一、下冊同巻二を収める。『可美豫能真起』の紙型は縦約二七・五メートルセンチメートル、横約一九・三センチメートル、『無刊記七行本』の紙型は縦約二六・三センチメートル、横約一九・二センチメートルで後者がやや上下に小さい。版型は共に上下の界線間が約二一・三センチメートル、版心外側と右（左）界線間が約一五・七センチメートルで一致する。墨付きは共に上冊六十丁、下冊五十二丁。

『可美豫能真起』は両冊共に縹色無地の紙表紙、短冊様の地模様の題箋に『可美豫能真起乾（坤）』とする。「加美豫能真起」という外題はおそらく「神代巻」の訓読みの真名表記と考えることができる。¹⁾

『無刊記七行本』は両冊共に朽葉色の紙表紙、界線入りの刷り題箋が見えるがほとんど剥落しており、墨でこれに補書して「日本書紀神代巻 上（下）」としている。補書と原題箋の記述は一致すると見て良いと思われる。

両本共に、上冊冒頭の二葉は「本朝史書」との見出しがあつて、『釈日本紀』巻一後半の「本朝史書」「日本書紀講例」の項を掲げる。ただし『釈日本紀』の記述のうち「序云……」「日本後紀曰……」などとの引用部分は欠いている。当該箇所は『新訂増補國史大系第八巻』『日本書紀私記・釈日本紀・日本逸史』（昭和七年・吉川弘文館）の「釈日本紀」の十二頁七行〜十六頁九

行に相当する。ただし國史体系本が底本とした前田本とは記述の細部で必ずしも一致しない箇所がある。第三葉からが日本書紀本文で、版心は「日本書紀 ○一」で、冒頭二葉分は独立した丁付けであるが、版心の意匠は同一である。

両本共に何者かによる書き込みが見られる。『可美豫能真起』では上欄余白に薄葉の付箋を貼つて墨または朱で詳細な書き込みをしており、界線内の本文の書き込みの跡は上冊に一箇所見えるのみである。付箋は上欄余白上下長および一面左右全長にわたる横長の用紙を貼り付けたものであり、上冊に二十一箇所、下冊に一箇所見えるが、この他に異なる紙型の付箋が大小取り混ぜて上冊の上欄に六箇所、下欄に五箇所、さらに半紙半切大の別紙に書き込まれたものが二点丁合および袋綴じの内側に各々一点挟み込まれている。これらは付箋に較べて書き込みの文字が大きく、何らか別意図で書かれたものとも考えられるが、内容は付箋と同様に本文についての注釈である。これら付箋類の位置は偏在しており、上冊では神代巻上天地開闢章冒頭から大八洲生成章一書第二迄の連続した十七面と四神出生章一書第十一から瑞珠盟約章本伝迄の連続した八面に集中し、下冊では冒頭の一面に貼付されている。

『無刊記七行本』では付箋は見えず、墨または朱で本文内に直接書き込んである。先ず朱で巻上下全編にわたって神名に傍線を付している。また墨および薄墨で注釈的内容を行間に書き

込んでいる。これらは特に元々の版本の訓を避けた左傍に多い。書き込みは巻上の冒頭近くが特に緻密であるが、ほぼ巻上下全編に見える。

先に述べたように、本書の文字詰め・行詰めが、何らか後の書き込みを意図したものとすれば、『無刊記七行本』の方が本来の出版意図に従った書き込みをしていることになる。あるいは逆に、『可美豫能真起』の書き込みは、何故敢えて欄外あるいは付箋に依ったのか、を考えることもできよう。おそらく先ず第一には、『可美豫能真起』では、本文の文面を汚すことを憚ったのではないか、ということが思い浮かぶ。『日本書紀』神代巻を神典とみなすことは広く行われており、これは首肯できることではある。しかし一方で『無刊記七行本』のように本文に書き込む例も少なからず存在し、そこには「神典」についての態度の違いがあったことを感じさせる。これを検証するには当然実際に書き込まれた内容を検討することが必要であり、これは元々の版本上の訓点とも不可分であると思われる。

『可美豫能真起』『無刊記七行本』の版組を、仮に行間字間への書き込みを意図したものと考えると、漢文本文に対する加點行為あるいは加注行為の質的な変遷を考える上で、重要な一本と考えられ、さらに版本の意図したように字間行間に加注した『無刊記七行本』と敢えて付箋に依った『加美豫能真起』では、その書き込みに何らか立場の違いが反映されているのでは

ないかとの予想も成り立つ。このような考察は、これまで調査し得た日本書紀の加點諸伝本や注釈書類について、改めてその系譜を描き直す作業の中で行うとして、先ず『加美豫能真起』『無刊記七行本』の版本としての本文・訓点を、他の諸伝本群の中に位置付け、併せてそれらに見える書き込みの概略を整理しておくこととする。

なお、『加美豫能真起』と『無刊記七行本』は同版とみなし得ることから、以下では専ら『加美豫能真起』について述べ、これを「本書」と呼ぶこととする。

本文の系統

一般に、日本書紀諸伝本の本文は、寛文九年版本（以下「寛文版本」あるいは「寛文」と略記することがある）を基準として、これとの異同から考察することが行われており、このことの妥当性についてはこれまでも何回か述べた。^⑤

本書の本文は、ほぼ寛文版本のそれに近く、これまで調査してきた日本書紀神代巻上下の諸伝本（写本・版本）の中でも最もこれに近いものの一つと言える。以下、寛文九年版本との異同の大略を示す。

先ず、最も大きな違いは、巻上瑞珠盟約章本伝の、天穗日命についての注文、

是出雲臣土師連等祖也 (本書乾冊三十一丁表二行)

(寛文九年版本二十三丁表二行)

および、続く天津彦根命についての注文、

是凡河内直山代直等祖也 (本書乾冊三十一丁表三行)

(寛文九年版本二十三丁表四行)

己 各 浦 杉
をそれぞれ、寛文九年版本では割り書きになっているものを、本書では割り書きとせず、本文と同じ文字組みで記している点がある。寛文九年版本をはじめ多くの伝本では、神代卷上下では訓注は、本伝部分では被注箇所が続けて割り書き、一書部分では段の末尾にまとめて付加し、割り書きとはせず、本書もこれらと同様である。このような記し方は、元々一書部分全体が割り書きであったことに由来すると考えるのが一般的なようである。このこと自体は措くとして、本書では、この箇所についてのみ、異なつた扱いとなっている。というよりもむしろ、本書ではこの二つの注文を注とはみなさず、本文の一部と考えているようである。確かに、祖神についての記述は、一書部分では他の訓注と同様に扱うのではなく、当該の神名に続けて記しており、本書の扱いもその記述方法に従つたものと考ええること

はできる。一方で、何らかこの祖神記述を重視する意図があつたものと考ええることもできる。少々穿ちすぎた見方ではあるが、本文全体がよく寛文九年版本に一致する中で、この箇所の差異のみが顕著であることから考えれば、何らか相当の背景を考えたい所ではある。

同じく本伝部分の割り書きについてであるが、卷上宝剑出現章の本伝で、素戔鳴尊の「八雲立」の歌の箇所について、寛文九年版本ではこれを割り書きとしているが、本書では割り書きではなく本文に続けて同じ記し方となっている。これも先の祖神記述と同様に、形式上の問題と考えることも、また特にこの部分の記述を「本文」として重視したことの表れと考えることもできよう。

さらに、卷下天孫降臨章本伝の、

「寛文」所植「植此云／多底婁」 卷二・二丁表六

の訓注部分(割り書き)六文字を本書は缺いている。

また文字詰めの問題であるが、卷下天孫降臨章一書第七に、「一書曰……」の後「一云……」として神名を列記する記述が四回繰り返されるが、寛文版本ではこれを一々行を変えて全五段に記すのに対し(卷二・二丁表一行以下)、本書では「一云……」は前の記述に繋げて記し、一段として扱っている(坤冊・三〇

丁表一行以下)。

同様に卷下海宮遊行章一書第一にも、「一云……」として類似内容の別伝を記す箇所が二箇所あるが、寛文版本ではここで行を変えて全三段に記すが、本書では「一云……」を続けて記し、行を変えていない。同じく同章一書第二、第三、第四の各々「一云」一箇所も同様の扱いとなっている。

なお、寛文版本巻二・一九丁表一行(天孫降臨章一書第五)に見える埋木による八文字分の訂正に相当する箇所は、本書では元々の正しい本文となっている。

これら割り書きや行詰めに関わる箇所は以上であって、以下は全て本文文字単字の異同である。先ず缺字としては、卷上瑞珠盟約章一書第二の、

〔本書〕 當奉汝以汝所持 乾冊・三四丁表四

〔寛文〕 當奉汝汝以汝所持 卷一・二五丁表八

の一箇所がある。おそらく本書ではこの連続する「汝」字を衍字と見て削ったものである。しかし前後から考えるとこれは天照大神に対しての素戔鳴尊の発話で、「吾は所持ける剣を今當に汝に奉らん。汝は以て、汝が持ちたる……」と続く箇所であり、「吾は」(「汝は」)という二文と見る限り、「汝以」の「汝」一字を削ることはできない。おそらく寛文九年版本の本文はそ

のように解してのものと考えられる。ただ、先行する「吾」字を「吾が所持ける剣」のように読むとすれば、「吾が所持」が後の「汝が所持」と対応することになり、前の「汝」一字を衍字として、

「吾が所持ける剣を今當に汝に奉らん。以て、汝が一所持ちたる……」と訓むべき、ということになり、本書の本文も首肯できるもの、ということになる。

同じく缺字の例として、卷下天孫降臨章一書第三に、

〔本書〕 條 坤冊・一七丁表三行

〔寛文〕 條條 卷二・一二丁裏六行

がある。共に「ヲチ」の訓が注されているが、この訓の踊り字部分が「條々」のように本文文字と解されて「條條」との本文が伝わったと考えられ、とすれば本書は此に従って「條」字一字を衍字とみなし、削ったものということになる(当然逆の解も成り立つ)。このような訓の踊り字と本文漢字との混同は比較的良好に見られることであり、その一例と言えるが、本書編者がそのような文献上のことに敏感であった証左の一端と見ることができよう。

単字の異同箇所は以下のようなものである。なお煩を厭うて延べの全例を挙げることはせず、各々一例で示した。

明らかな異字は以下の七点である。

A 大八洲生成章一書第一

〔本書〕脩 乾冊・七丁表一行

〔寛文〕循 卷一・五丁表八行

共に「シラス」と訓でいる。他本では、水戸本、慶長勅板本、校正日本書紀、が寛文と同じく「循」とするが、他の弘安本、乾元本、丹鶴本等は「脩」としている。前後の意から推しても、また「シラス」と訓まれる他の用例から見ても「脩」がふさわしいと考えられ、国史大系、古典文学大系も「脩」を採っている。おそらく本書は寛文版本のそれを訂正したものであろう。

己 克 浦 杉

B 大八洲生成章一書第一

〔本書〕億岐 乾冊・八丁裏二行

〔寛文〕隠岐 卷一・六丁裏三行

この箇所を「億岐」とする例は他の伝本には見えない。また同内容の記述がある同章本伝では、本書は「隠岐」（乾冊・六丁表七行）としている。従ってここに挙げた異同は本書の誤記と考えることができる。これが何らかの底本に依ったものか、本書独自の誤記かは判断できかねるが、おそらくは後者である

う。

C 大八洲生成章一書第五

〔本書〕相語 乾冊・九丁七

〔寛文〕相謂 卷一・七丁五

他の伝本は多く「語」字であり、本書は寛文のそれを誤記と見て正したのであろう。

D 四神出生章一書第六

〔本書〕天照太神 乾冊・二〇丁裏三行

〔寛文〕天照大神 卷一・一五丁裏四行

他の多くの箇所についても同様である。ただし、本書で「大」、寛文版本で「太」とする箇所もわずかではあるが存在する。同神の名を「天照大神」とするか「天照太神」とするか、について論じた記述は、日本書紀の注釈書類をはじめかなりな数に上る。日本書紀諸伝本では多く「大」字を採っているが、「太」字に依って統一したものもあり、本書も何らかの定見を持つてのことであろうと想像はできる。

E 瑞珠盟約章本伝

〔本書〕凡河内直 乾冊・三二丁表三行

〔寛文〕凡川内直 卷一・三三丁表四行右

他の諸伝本では「凡川内直」とする。しかし日本書紀神代卷を離れ一般に氏姓の称としては、本書出版当時を考える限り、むしろ「凡河内」とする方が多いと思われる、またゆかりの地名の記述も「河内」が多いようである。従って本書はそれらの知見から寛文版本の記述を訂正したものと考えられる。

F 宝鏡開始章本伝

〔本書〕曰 乾冊・三八丁裏三行

〔寛文〕口 卷一・二八丁裏三行

寛文版本でも異版では「曰」字を採っており、また前後から推してもこれは寛文年版本の誤記であって、他の諸伝本でも同様である。仮に本書が「口」字を採る寛文版本を底本としたものとすれば、これも誤記を正した例ということになる。

G 海宮遊行章一書第三

〔本書〕釣鈎 坤冊・三三丁表六行

〔寛文〕鈎鈎 卷二・二四丁裏一行

両本共に二文字で「チ」と訓んでいる。他の伝本では乾元本が「鈎鈎」、丹鶴本が「鈎」とする他は「釣鈎」とするものが多い（古典文学大系本は「鈎鈎」。国史大系本も「釣鈎」を採っている。これらから推して、これも本書が寛文版本のそれを正した例と見ることが出来る。なお寛文版本も含めて、この海宮遊行章の他の箇所では、「釣り針」は「鈎」一字で記し（「鈎」字とする伝本もある）、「チ」または「チイ」と訓んでいる。従ってこの箇所のみ二文字とするのは不審とも言える。その故か寛文版本では前後に、

授ル^ツニ所得^ル鈎^チ一ヲ鈎因^テ誨^ヘマツリテ之曰^ズサク

のように加点して、「鈎」一字で「チ」と訓めるようにしている。しかしこれでは後の「鈎」字が浮いてしまい、解決になっていないのであって、結局「鈎鈎」二字で「チ」と訓まざるを得ない加点である。本書は他の多くの伝本と同様の考え依つたのであるうと推測はできるが、疑問の残る箇所ではある。

以上の六点以外は、いわゆる異体字にあたると判断できる文字の相違である。以下に上段本書、下段寛文版本の形で列挙する。（位置の記述も「丁」「行」を略し、表を「オ」、裏を「ウ」のように簡略に示した。また同例が複数見られるものについては一例のみを掲げた。）

| 章段 | 本書 | 寛文版本 |
|------------|---------|---------|
| 天地開闢章 本伝 | 妙(一才五) | 妙(一才五) |
| 神世七代章 本伝 | 富(四才二) | 富(三才五) |
| 〃 〃 | 面(四才二) | 面(三才五) |
| 大八洲生成章 本伝 | 陰(五ウ二) | 陰(四才七) |
| 〃 〃 | 宜(五ウ五) | 宜(四ウ二) |
| 〃 〃 | 處(六才二) | 處(四ウ五) |
| 〃 〃 | 即(六ウ三) | 即(五才四) |
| 〃 〃 | 往(七才一) | 往(五才八) |
| 己 一書一 | 備(八ウ三) | 備(六ウ四) |
| 浦 〃 | 一書二 | 霧(六ウ七) |
| 杉 四神出生章 本伝 | 青(一二才七) | 青(九才八) |
| 〃 〃 | 一書三 | 土(一一才二) |
| 〃 〃 | 一書六 | 吐(一四ウ五) |
| 〃 〃 | 一書七 | 劍(二一ウ二) |
| 〃 〃 | 〃 | 拖(一六ウ二) |
| 〃 〃 | 一書十 | 答(二四ウ四) |
| 瑞珠盟約章 本伝 | 眞(三〇ウ二) | 眞(二二ウ五) |
| 〃 〃 | 一書二 | 黒(二五才五) |
| 宝剣出現章 一書五 | 杉(五四才二) | 杵(三九ウ六) |
| 天孫降臨章 一書四 | 高(三〇才一) | 高(二二才一) |

字体の違いの認定は本書・寛文版本共に微妙であり、字形の違いの範囲にあたるか否か、また書体の違いに起因するものではないか、など判断の付きかねる例は多い。本来であれば異体字として掲げるべき例はなお多いのではあるが、ここでは比較的顕著と思われるもののみを掲げた。

これらを見ると、本書は寛文版本のそれを、いわゆる正字に正そうとしたもののようにも思われる。しかし、その逆になっているものもあり、また何を持って正字とするかも一概には定め難い。さらに、例えば本書「宜」、寛文版本「亘」の例について、寛文版本では「宜」字も一部に併用(巻二・三五才五など複数)しているなどの事実もあり同様の逆例も存在する。

確かに、字体に関しては本書は寛文版本のそれに比べてある程度統一がとれているようにも見えるが、それはあくまで印象の域にとどまり、本書が何らかの定見によつて寛文版本のそれを正し、統一を図つたものと判断することは難しいと思われる。

ただ、先に掲げた本文文字の欠落や異同とも併せて、本書の本文は寛文版本にかなり近いものであつて、管見の限り、他の諸伝本と比べ、最も近い関係にあるものと言ふことはできる。おそらく本書本文は全面的に寛文版本のそれによつて成つたものとみなしてよいと思われる。

版本としての訓読

本書の版本としての訓点とは、江戸時代後期の日本書紀神代巻諸伝本に見えるそれと比較して大きな差異はなく、寛文九年版本に見える訓点を受けたものと考えられる。ただ全体に加點密度が高く、省略表記も少ない点が特色ではある。これは本書の字詰め・行詰めについて想定した初学者の学習用途という点からも首肯できる所である。

以下にいくつかの点に分類して本書と寛文版本の訓点の相違を概観する。

使役句形の訓読

日本書紀の諸伝本において、いわゆる使役句形をどのように返読して訓むか、という点が、当該の加點資料の訓読全体の系統を考える上での端的な指標になる、ということについてはこれまでにも何回か述べてきた。本書および寛文版本の使役句形の訓読を比較すると、

天孫降臨章本伝

〔本書〕 遣^{マタ}無名雉^{ナナシキジ}伺^{ヨミセユフ} (坤冊・二二丁裏四行)
 〔寛文〕 遣^{マタ}無名雉^{ナナシキジ}伺^{ヨミセユフ} (卷二・二丁表五行)

などのように、同様の扱いをしていることがわかる。またこれに関連して、

四神出生章本伝

〔本書〕 使青山^{アラヤマ}變枯^{カクセイ}ニチス (乾冊・二二丁表七行)
 〔寛文〕 使青山^{アラヤマ}變枯^{カクセイ}ニチス (卷一・九丁表八行)

の例では、漢文本文自体は使役の形であるが、前後の意を活かして使役の意には訓読しない、という点も両書共通である。

従って、本書と寛文版本の訓読は、基本的に日本書紀神代巻諸伝本の中で同じ系統に位置付けられることができると見てよいであろう。

仮名遣い

個々の字句に見える加點を比較すると、先ず仮名遣いの相違が目につく。ハ行・ア行が特に顕著で、

本書 (乾冊) 寛文版本 (卷一)

| | | |
|----|-------------|-------------|
| 残 | ソコナヒ (一三才四) | ソコナイ (二〇才一) |
| 悶熱 | アツカヒ (二四ウ五) | アツカイ (二一才五) |
| 匍匐 | ハラハヒ (二六才二) | ハラバイ (二二才五) |
| 來追 | ヨヒイデ (一八才四) | ヨイムデ (二三ウ六) |

などのように、ハ行活用動詞に由来する語について、寛文版本のそれを正した例を多く拾うことができる。これは他の品詞語句にも見え、

| | | |
|-----|------------|------------|
| 漱 | アラヒ（一九ウ二） | アライ（二四ウ五） |
| 乞取 | コヒトリ（三〇ウ五） | コイトリ（二二ウ八） |
| 喧響 | オトナヒ（二七ウ二） | ヲトナイ（二〇オ五） |
| 蠶 | カヒコ（二四オ四） | カイコ（二〇ウ六） |
| 日将 | ヒトヒニ（一八ウ五） | ヒトイニ（一四オ五） |
| 八百重 | ヤヲヘ（二一オ二） | ヤヲエ（一五ウ六） |
| 梭 | カヒ（三七ウ一） | カイ（二七ウ六） |
| 八重 | ヤヘ（三九ウ四） | ヤエ（二九オ五） |

などを揚げることができる。
しかし、

のように逆に寛文版本の方が本来の仮名遣いである例も見られ、また全体としては寛文版本のそれと本書が一致している例が大半なのであつて、本書が統一して歴史的仮名遣いに依つてゐる訳ではない。⁽⁸⁾ 先に挙げたハ行活用語の例を中心に、寛文版本のそれを正す傾向が見られる、という域に留まる相違である。同様の例はハ行・ア行以外にも、

| | | |
|----|------------|------------|
| 遂 | ツヰニ（一六オ五） | ツヒニ（二二オ七） |
| 可愛 | エ（八オ六） | エ（六ウ一） |
| 可以 | オボセ（三〇オ五） | ヲボセ（二二ウ三） |
| 曰 | オホサク（三八ウ三） | ヲホサク（二八ウ三） |
| 科 | オホスル（三九オ三） | ヲホスル（二九オ一） |
| 墮 | オチ（三九ウ二） | ヲチ（二九オ五） |
| 為起 | オコシテ（四九ウ七） | ヲコシテ（三六ウ五） |
| 大造 | オホヨソ（五六ウ一） | ヲホヨソ（四一ウ二） |

などを挙げ得るが、これにも例えば、

本書（乾冊） 寛文版本（卷一）

少男 オトコ (九ウ三) フトコ (七オ八)
 悔 クサテ (一九ウ一) クイテ (一四ウ四)

などのように逆の例も見えて完全ではなく、傾向の域に留まるとしなくてはならない。

音便形

本書の訓読では、音便形を用いるか否か、およびその表記に、寛文版本との差異が見られる。

本書 (乾冊) 寛文版本 (卷二)
 語 カタツテ (九オ七) 謂 カタテ (七オ八)
 明彩 ウルハシウシテ (一一ウ四) ウルハシクシテ (八ウ八)

本書が音便形を用いた例が比較的多いが、

本書 (乾冊) 寛文版本 (卷二)
 詰問 ナジリトヒ (二九ウ五) ナジテトヒ (二二オ五)
 賜 本書 (坤冊) 寛文版本 (卷二)
 タマフテ (二オ六) タマハツテ (二オ二)

などのような例もあり、これも傾向の域であり、全体としては寛文版本に一致する。

個別語句の訓読

本文漢字二文字の熟語の訓読について、

本書 (乾冊) 寛文版本 (卷二)
 底下 ・・・ソコ (五オ三) ソコツシタ (四オ三)
 牛馬 ムマウシ (二七ウ一) ウシムマ (二〇ウ二)
 風雨 アメカセ (四四ウ五) カセアメ (三三オ二)

のような例がある。

漢字二文字の熟語について、特に意味上二語の並列になって、いるような例の読み方として、訓読みの場合、元漢語と逆順になる例があることは山田孝雄博士のご研究によって夙に明らかにされていて、日本書紀諸伝本に見える訓点でもこれが確認できている。特に同じ訓読みであっても、元漢文の文字の順に読む例よりも、逆順に読む例を多く持つもののほど、訓読文として見た場合、和文的な性格がより強いと考えられる。この点からすれば、本書訓読が敢えて逆順の訓を採っていることをその性格の一端と考えることはできよう。

さらに、

本書(坤冊)

寛文版本(卷二)

男女 オトコヲンナ(一六オ三) ヲメ(一二オ二)

の例では、和語では一般に「メヲ」であることと本文漢字の順序との整合とるため本書では敢えて「ヲトコヲオンナ」と二語に訓んだのではないだろうか。

この二文字熟語の訓読に関連して、

四神出生章一書第一

〔本書〕 御^{シラスヘキアメノシタ} 宙^{シラスヘキアメノシタ} (乾冊・一二丁裏四行)

〔寛文〕 御^{シラスヘキアメノシタ} 宙^{シラスヘキアメノシタ} (卷一・九丁裏四行)

のような例もある。

訓読に充てられる語自体の相違としては、

四神出生章一書第六

〔本書〕 臨死 マカルニノソンテ (乾冊・一九丁表五行)

〔寛文〕 臨死 マカルニヲヨンテ (卷一・二四裏二行)

〔本書〕 染 ソム (乾冊・二二丁裏四行)

〔寛文〕 染 ソマル (卷一・一六丁表六行)

瑞珠盟約章本伝

〔本書〕 元 モトヨリ (乾冊・二九丁裏六行)

〔寛文〕 元 ハジメヨリ (卷一・二二表五行)

宝鏡開始章本伝

〔本書〕 何則 イカントナレハ (乾冊・三七丁表二行)

〔寛文〕 何則 イカントナラハ (卷一・二七丁表八行)

宝剣出現章一書第二

〔本書〕 石上 イソノカンノカミノミヤ

〔寛文〕 石上 イソノカンノミヤ (乾冊・五一丁表七行)

天孫降臨章本伝

〔本書〕 然敷 シカルカ (坤冊・三丁表五行)

〔寛文〕 然敷 シカルヤ (卷一・二二丁裏四行)

〔本書〕 胸上 タカムナサカ (坤冊・三丁表七行)

〔寛文〕 胸上 タカムナサキ (卷一・二二丁裏五行)

天孫降臨章一書第一

〔本書〕 我 アレ (坤冊・一一丁表四行)

〔寛文〕 我 ワレ (卷二・八丁裏一行)

海宮遊行章一書第三

〔本書〕 高田 タカタ (坤冊・四四丁裏三行)

〔寛文〕 高田 アケタ (卷二・三三丁裏七行)

などの例があり、またいわゆる助字類の扱いに関して、

宝鏡開始章一書第三

〔本書〕 于_レ時_二 (乾冊・四四丁裏一行)

〔寛文〕 于_レ時_二 (卷一・三三丁裏七行)

などの例がある。

「染」字の「ソム」「ソマル」などは、加点者の意図と本文の記述内容との関わりとの反映とも考えられな興味深く、また文末の「歟」字を「カ」とするか「ヤ」とするかの差異もお慎重に考えなければならないなど、問題は残るが、全体として見た場合、本書の加点は寛文九年版本にごく近いものであることは確かである。

まとめと展望

今般版本『加美豫能真起』を調査し得たことによって、これまで不詳としてきた同版の『無刊記七行本』と併せて、日本書紀神代卷諸伝本の中に位置付けることが可能となった。また本書の本文および訓点は、寛文九年版本のそれにごく近いものであつて、文字詰め行詰めが書き込みを意図したものと想定されることについて、本文や訓点からその証を見出すことはできなかった。

今後はなお、『加美豫能真起』『無刊記七行本』に見える書き込み・付箋類の記述を精査し、他の伝本に見えるそれら、及び本文から独立して記されるいわゆる注釈類の記述と比較検討することによって、「書き込み」という行為と、加点、注釈という行為の相互の関係を明らかにしていく必要があると考える。

注

- (1) 放送大学研究年報第十九号 (平成十四年三月)
- (2) 杉浦克己「江戸時代の日本書紀訓読について―神代卷の敬語表現を中心として―」(訓点語学会『訓点語と訓点資料』第八五輯・平成二年)
- (3) 杉浦克己『六種対照日本書紀神代卷和訓研究索引』(平成七年・武蔵野書院)
- (4) この外題の表記にはなお疑問が残る。少なくともこれが上代からあつた名称とは考えにくいとせざるを得ない。例

えば「真起」の「起」字は、上代文献を見る限り万葉仮名としての用例がないものである。また「真起」を「巻」の訓読み「まき」の万葉仮名表記と考えると、「き」には甲類の仮名が推定される（力行四段動詞の連用形名詞用法）。しかし「起」字はその韻から推す限り甲類の仮名とは考えにくい。従ってこれは後世の表記と考えるべきであろう。ただしこのことが直接、上代における「カミヨノマキ」という名称の存在を否定するものではない。また「起」字を字母漢字とする「き」平仮名は比較的広く用いられており、このことからすれば、万葉仮名としての「起」字の存在も想定できる。さらに「起」字自体の韻にも考慮すべき点が多く、上代の日本語の音韻との関わりはなお慎重に考えるべきであろう。これらのことから、敢えて補注として述べるにとどめた。

(5) 例えば國學院大學日本文化研究所『校本日本書紀』（昭和五一年・角川書店）は底本に寛文版本を置いて本文の校異、訓点の差異を示している。

(6) 前掲（3）書及びその後のいくつかの小考。

(7) 前掲（3）書及びその後のいくつかの小考。

(8) 「遂」字を「ツイニ」とすることについては、加点者は、歴史的仮名遣いに合致すると見ていた、とも考えられる。（字音「ツイ」由来。ただし他語句の訓読から見て、字音そのものと認識していたとは考えにくい。）

A philological study on *Kamiyonomaki*

Katsumi SUGIURA

Abstract

Kamiyonomaki is an unrecorded printed text of the first two books of *Nihonshoki*, published in the latter of Edo period.

The format in page-effect of *kamiyonomaki* was unlike other printed texts of *Nihonshoki* or Chinese classics in Edo period. This book was written seven lines to the page, with plenty space between lines. This format was designed for the interline annotations or diacritics different from printed ones.

The printed text characters and diacritics in this book bear resemblance to *Kanbunhanpon* which is a popular edition of *Nihonshoki* in Edo period. Therefore, this book was written on the model of *Nihonshoki*, similarly to the other printed books of *Nihonshoki* in Edo period for the most.

It remains to be proved that the printed format of this book influenced on the interline notes on this book, and the variants.